

工 更  
産 馬  
秋  
の  
露

074412-000-7

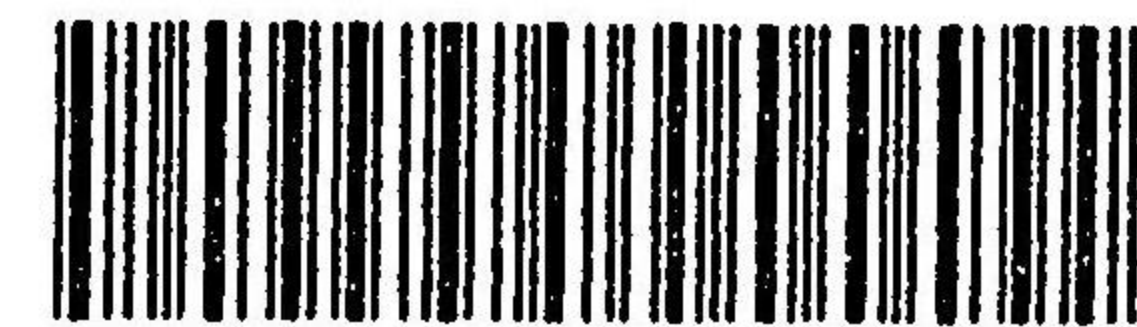
特53-391

萩の露

日本赤十字社静岡県支部長上敷知浜名三郡在住社員／編

M28

CEI-1664





V-32

3997



土 曳  
産 馬

萩

の

露



55  
391

としがき

征清の師起りて茲に一年。我海陸の軍人は。畏くも  
大元帥陛下の。大詔勅のまゝに。火砲の雷。矢玉の雨  
を侵し。晝夜を問はず。寒暑を分らず。家も身も忘れ  
て。奔走するも。

一かゝる鳥は。まにけちりて獵人乃いささ甲斐なれ唐  
土が原

と某氏の詠をれば。けむ如く。一旦戦止みしひまことの。

風朝雨夜に。無聊に苦しみ玉ふの時ありとさく。よ  
りて吾三郡赤十字社員五百四十二名。れ協賛おより。近  
郷隣里に募りて。一の小冊子を編輯し。郡下出身従軍諸



君の坐右に。一本を呈して此無聊を慰藉し參らせんとす。あはれ從軍諸君よ素より陋巷の俚調。見るに足るものなしを雖も。一讀の榮を玉へ。讀みて笑ひ玉ふ可なり。頤をはづし腹を抱へたを尤も可なり。これよりてさういふ片故郷人の心情如何をさとり玉い。編者の以て光榮とする所なりかし。

又出詠中へは。意味の深遠なるもの數多あれど。そは募集の目的にあらざれば。愛を割きて洩すことゝはなしぬ。應募諸君其こゝろしてよ。

明治廿八年三月

編者識

曳馬萩の露

日本赤十字社静岡縣支部編輯  
長上敷知濱名三郡在住社員



(日清交戦)

十湖

唐衣うつべき時の來りけり

(民政廳)

同人

からくさにはうるはふ露の光哉



夷馬秩の露

東

日本赤十字社静岡岡部支部  
長上敷知濱名三郡在住社員編輯



西

十湖

唐衣のつべき時ハ来りけり

民政廳

同・人

かきくさひさるはふ露の光哉



〔征清軍〕

同人

國のため忘るゝあつさ寒と哉

〔征清〕

同人

掃さのくす煤や手そろひ顔揃ひ

〔征清軍の寒氣を思ひやりて〕

一 哉

寒菊の覆をするに雪の梅

〔支那軍〕

牛田友質

唐人は大艦曳てきた里けりみるすそ川の清波流よ

〔祝捷祭〕

同人

海士か子も君萬代と祝ふ哉ゑみしか舟を我ものにして

〔敗清〕

同人

今更に脱て詫ふらんか衣弓手も馬手を袖の破つゝ

〔御國人〕

同人

たゝかどぬ身にも力れみつる哉わか御軍の勝にかつ程

〔赤十字社犒軍〕

同人

なし得へき程と力を添る哉れなし心をますら武雄に



〔赤十字社病院〕

同人

取あへず彼是わかつて救ふ哉あかさをねなし心よはして

〔戦捷〕

松井敏吉

豚れ肉裁いて馳走の雪見哉

初雪や趣向のかはる豚料理

〔新日本〕

野々村如莊

廣がりて未頼母しや苗代田

〔新年試筆〕

高橋八郎平

あら玉の年れ始に熊手とり萬の支那を今にかきとる

〔赤十字精軍〕

高部梁三

赤ひ心を十字に掛けて盡す心も國の爲め

〔祝征清大勝〕

柳川佐平

もろこし波吹き倒えたる野分かな

〔戦地〕

水野喜太郎

日の本と時計と心つむ替りなり

今日もカチ／＼翌もカチ／＼



〔支那敗軍〕

岩佐道錦

大まけで四拾苦戦の品(支那)ものい

着る(斬)かひもなだトンビ(豚尾)なりけり

〔祝捷祭〕

竹村佐代吉

町村も國旗でせまし勝祭り

〔征清〕

水野喜三郎

日の力とけぬ氷もなかまけり

〔祝捷祭景況〕

新所友之

響る聲國にほふる、花火哉

〔連勝連捷〕

同人

勝菊の庭一はいにかをりけり

〔入營者を送る〕

鈴木金平

國の爲め行く兵士を送るのと土産乃しなをほしき之梟

〔題しらす〕

北總愴父

うそをつく青たいさつくはなをつく

つくくしなとどんつくのくに



はかんびんあんけふかんでらあかん

このさんかんが今の朝鮮

北京とは北る京の名なりけり

滿清増長せけんへ馬鹿をうり

〔川柳四首〕

濱松偶庵

黄海のあとのまつりは尙威海

鴻章な舌も揮毫と身も振へ

豚尾漢調子はつれてトシナンカン

神風よ北京と折らるゝ我滿清

〔都々二三〕

松本金吉

實に見事な日本の料理殊更くはいと切る手際

大和おしさと比較は無理よ障りや破れる唐衣

〔連戦連捷〕

福島村漁夫

徒らな、小僧お着せた、チャンくは

昨日も破れ、今日もまたく

れ清さん、余りりんたを支那さんな



直きお日本の角がニヨツコリ

〔平壤陷落〕

松島 鯉

呐喊の勇みにちるや芥子坊主

〔戦死者吊祭〕

大石一やう

國の爲め深山に露と消るとも

芳ばいさ名は朽ち果てもせそ

〔無題〕

美和七次郎

高慢にひるけし支那の一枚圖

破れてとぢを殘すシンテイ

〔下、二〕

中村清太郎

丁汝昌として生てゐ居たが死なにや操が立てられぬ  
私も大和は生れたからにやいさぎ吉野の山櫻

〔川柳〕

同 人

大寺乃名譽百尺より高し

〔十七字〕

河輪青柳

ちやんくをつるし柿とはこりやいかに



《從軍者に代りて》

大石秀次郎

君がためすつる命はれしからず

國津社乃神となる身は

《原田重吉君》

生熊惣八

のりこへし垣の高さにくらべても

猶あまりある譽をなりけり

《希望》

福田風月

四百余州衣團子に取て四月三日の供へもの

《丁汝昌》

生熊惣八

二人のせい主を私しや持まいと死ねばあは

うも貞女せう

《日本軍》

渡瀬又太郎

勇々しさや霞の中の日の御旗

皇國の威をはる風の吹日かな

《狂歌》

中村清太郎

一むきに心をこめてをろこしを刈せば粟食ひ逃げるさ



ひよら

〔無題〕

金原加茂平

負ける商ひ見切か大事置けば寝腐る支那じやもの  
雪の達摩とチャシく坊主日の丸見れば消かゝる

〔町村入營者に送〕

同人

やがて着る錦を待つや若楓

〔清兵〕

栴弓ひけと案山子とかゝしかる

〔町村入營者を送る〕

中川金字

鶴の子の巢を立つ日こそ長閑なれ

〔連戦連勝〕

同人

唐國や大和撫子咲はこる

〔川柳〕

小田佐一郎

勝軍四千萬人力癩

〔都々逸〕

同人

主の入營涕は出たが國のれためのうれしなき



〔支那敗軍〕

物好

負ぶりのをか支那さまよ豚角力

〔無題〕

寺田善太郎

支那にやなをぶぬ放蕩(豊島)娘威海世話去て黄海さ

〔入營者を送る〕

神久呂羽客

火に焼けず水に溺れぬ真心を

御國のために盡せ大丈夫

〔川柳〕

水の重次郎

もろこしを砂糖(佐藤)大佐がひと丸め

〔征清〕

岩佐雅樂多庵

日の出る國から日れ入る國をてらま時節が来たわいな

からのしと草みなさりすてゝ大和なでゝ植てやれ

〔軍人家族保護〕

中川金字

留守の戸も洩らさぬ梅の薫り哉

〔題しらす〕

濱松偶庵

劉公の編からとても破れそり



ぼろとなつたり捕虜となつたり  
またしても威海ね世話を素浪人

英よ今見後獨逸もかいつも  
山東で百戦捷をはぢさたし芝罘三十四かそへ進まん  
まけらんのおたり相場は五十億

〔出たらしめ三〕

北総倉夫

かくらしはでんでこまひのばかはやし

支那の軍艦帆前たそふでいつもねしりへ帆をかける  
雞豚ではたべでがないよ驚のすひもの獅のなべ

〔赤十字病院〕

松井敏吉

日の本の眞心見えて赤十字尽す治療の一視同仁

〔戦捷〕

松井敏吉

日の本の瑞穂は日々おいや増すに

何とて支那はからとなるらむ

〔支那敗軍〕

福島豊策



安ひ支那四十苦戦でまだまける

〔川柳〕 福島豊策

芥子坊主北京と折るやにはほれ指

〔狂歌〕 同人

吹ひてくく吹た損ひて破れて音を出ぬ漁らの貝

〔丁汝昌〕 伊藤善玄

丁汝昌のこの駄法螺も似もやらで

威海大まけ怪虜のこゝろさん

山 〔謎〕 山本清太郎

今の日本どカケテ 何んどく 仲買商人どむく

心は 大なる支那をうつなりかつたり

〔都々〕 都盛文八

支那のふるふは臆病からよ我のふるふは日本刀

〔狂歌〕 同人

番頭は李鴻章でも店は闇思案投首あたま覺羅氏

黄海で白旗たてて青ざめて赤耻かいく船と黒焼



〔川柳〕

同人

よく吹た法螺もどろく尻が破れ  
もろこしの團子よほんの手で丸め

勝將榮先金州もぶつたくり

〔千波昌〕

關川美建

飛出してふみるぶされ一蛙かな

〔無題〕

青山市郎

山海の珍味を頼と並べさせ好たる支那を太活さんどる

〔カラマケ〕

加藤素山

大金の威海旅順も落ち果て

恭じや李公も丁のわるさよ

〔坊主〕

大石秀次郎

ちやんくくのちやんくくらしくまけにけり

〔降服清國軍人〕

辻真城

疲果た身のあどれまりくだり結

〔清國皇城の陥落を豫期して〕



北京城書解ととも崩れけり

〔祝捷祭景況〕 辻真城

万歳を歌ふて國の良草は手の舞ひ足の踏處を犯

〔入營者と送る〕 松本逸次郎

橋に駒下駄兵士の門出かつたくと送る人

〔ド、一二ツ〕 松本逸次郎

日本は勝手鳴る拍子木を

支那ではチャン／＼虫はなる

一寸手ふとり北京どいはせ是で日本と成るお箸

〔三十一字〕 河輪青柳

降るならなどはや白旗掲げんぞ

些のちよこごの威海御苦勞

〔町村入營者を送る〕 (葉歌我もの替歌)

高部梁三

我がものと思へは輕き村田銃國の重荷を肩に掛け支那

狩り行けは春の日の筒袖軽く打ち續久旭日にうつる旭



の御旗實に勇氣じやないかいな

〔佐藤大佐の捷戦〕

宮崎意之八

玉蜀黍へ砂糖を入れて味をよく日本の箸で喰まわると是

〔歩哨兵〕

中村平一郎

雪の降る日も風ふ之夜も君は忠義の歩哨兵

〔深くとも〕

岩佐龜太郎

深くともいかでひるまん鴨縁江泳ひで渡る斥候兵のそ  
いて死たか敵壘を豚尾の様子はドウヒやいな

〔征清軍〕

渡瀬又太郎

菊の香に外つ國の闇破れけり

〔祝捷祭に餘興の棒押を見て〕

鈴木金平

しなむるい棒押合の面白さペキンと折れて勝鬨があく

〔占領地の未來〕

金原さた

日の本のひかりにからの一草も

ともに色ます春の長閑さ

〔御万歳〕

作者不知



支那國を鼓かわりよ我か兵しぼんくどうの秀才の聲

〔赤十字看護婦〕

金原加茂平

雪の白衣肌へに着けて盡すころの赤十字

支那の軍艦弱い様で強い日本の水雷みな喰つた

〔占領地人民〕

佐々木源六

飼ふ人の心につるゝ蠶かな

〔軍人家族保護〕

辻真城

雪の家けむるも君の恵みかち

〔支那人根性〕二ツ

宮崎太三郎

鳳凰どころかたいぼふ氣とり今じや北京で味噌さかい

一省ぐらゐと平氣で居たが是じやたまらぬ山東省

〔李爺〕

長谷川治三郎

高慢は得てまけやすい角力とり

〔都々逸〕

梅本初太郎

串に刺るか養染にーようか生の慈姑の料理かた

〔李爺〕

鈴木金平



李鴻章達摩老爺となりけり

防く手もなく逃げ足もなし

《出たらめ》二ツ

凸凹生

私しやをか支那劉公病でいかいね尻もからぐだり  
威海支那でも破れりや安い宋慶四百に踏倒せ

《川柳》

杉浦公正

もろこしは粉名にせられて寒晒し

《都々一》

大賀辰太郎

黄海が先にたふぬた、そりやたが云ふた

つよく旅順に威海衛

《出たらめ》

一筆庵

捕はれて籠にいらしとんび等り

たゞ捕虜々々と鳴てばつかり

《清兵の弱さを》

坂原苟文

あたまから尻尾を垂れて日本には

かな碗まで、逃る支那兵



《軍人家族保護》

今田源作

圖を指して遺族慰む春の雨

《あゝもの盡くま》

長谷川治三郎

借でもないくはないものは 支那は野蠻で仕様がな  
 夫でも自分は氣がつかない 狡猾亂暴とめ度がない  
 頼馬揃をで智者いなん 無<sub>い</sub>筈政治が届かない  
 社界の道理にとまらなん 文迷怪化でつまらない  
 詰つてないのは金がない 外債募集は氣がさかあ

人民附ぬけでたわんなん 國に盡すの義務がない  
 口のみ達者で技<sub>わざ</sub>がない 兵士と腰ぬけまに合はなん  
 合つた<sub>てんと</sub>日輪<sub>を</sub>光りもない 戦争はじめて勝つ事ない  
 逃げるが上手に進まなん 鐵砲とられて手もでない  
 生捕せられて意苦地ない 自業自得<sub>じごふじとく</sub>でしかたがない  
 うつとして居<sub>る</sub>首がない 命がないなら金いらない  
 今更<sub>に</sub>こちかひ叶<sub>は</sub>ない 降参するとは情けない  
 入用倒れで徳はなん 馬鹿と疝氣に薬がない



ないもの尽しも種がない 爰らでやめぬとやまらない

（チヨボクレ節）

同 人

エー恐れながら失敬ながら遠慮さらひの阿房多羅坊主  
がツットとつこい僕は斬髪さんざり阿房が腹から出任  
せ無闇無鐵砲にドン／＼かき出すれ經の文句は字違ひ  
片言假名ちがひ何がなんだか蟹が噛んだか譯もわから  
ずれかしむけれども御可笑ひ處が軍人方の御慰み何卒  
みなさん御覽なされて下さいな木魚の音

借でも私しが申述べませ一條は日本の國の隣りに置て  
鳥と豚との喧嘩のあらまし此れトやからとて事明細お  
私しや見なぬから知らないけれども新聞雜誌で見たり  
聞たり夫をつまんでね經を作つた（チヨボクレ節）此節日  
本は文明開化で萬國交際ひらけし以來交易繁昌昔徳川  
政治の頃とはすのかり變つてれしがるチヨンマケさく  
りどのさんで思ひ切つたは斬髪頭だれ駕は人力飛脚は  
電信舶來仕掛けで誠に早いぞ夫おマダ／＼二本の大小



腰にたばさみ理會に負ければコリヤノノ貴様の無禮者  
 だぞ下に居ロト理も非も言はずにさう捨御免で威張  
 た御方も筒袖着物で唐ざん前垂れ腰お矢立で算盤ぱち  
 々々天窓あたま井戸堀る士農工商四民同等だんなもれさん  
 も理屈づくめて強弱平均ちゑさへおれば人才登用誰ふれで  
 も構はん權兵衛太郎作八の字ね髻に黒の紋附山高帽子  
 で官員様だよだから當節學校べんたやう小供もなか  
 々々馬鹿よのならない理學化學を研究けんきうするから雷様が

臍へちを取るとの地獄で鬼が舌を抜くとこてかの胡麻化したとし  
 は滅多にや聞かないヤレ々嬉うれしい明治の聖世陸海軍  
 の備へは厳しく内外うちとを鎮護まもりて國威を強ふし旭の光りは  
 世界に輝く（チヤンクハインガク）夫は借置き去年の頃から日本  
 の近所でコトシと名高き大きな鳥と豚の親方けんか  
 始まる元の起りは其処ところの大家たやか家内の治めが届かぬと  
 こから内輪にゴタ々々俄にわき出た丁度此家にコトシ  
 と豚との寄留の身分で互に協同事を治めて本筋なるの



に豚はあかしく慾ばり根生狡猾さわまる獸類であるから瓜の皮でも南京瓜の軸でも石や瓦と喰はないばかりで腐敗ものでもムシヤしく喰ひます妙な事にはた金が大好きほんとに穢たない豚尾の腹中騒ぎを幸ひ此の家よあるもの横取りなさんと此の事小分に觸れて廻すと小分のやつらの此奴やたとブーくポークとこのんくど追々出てくる此れを見附けたコトは鳥殿この家の難澁みるに忍びすコレく豚さんお前はあんまり

腹がきたない悪い了簡やめなさやんかんと忠告したのよ豚の親方糠に釘にてさつぱりさかない益小分を大勢集めて望をとげんと亂暴ろうせだ今はコーシも四きりよ四たりで八ッ切りしたかられのれ豚めが自己の親切仇にて報ふの捨て置きがたしと此事我國鳥の連中へ通報てやつた鳥の連中怒ったくバタノ羽根を叩いて怒った我々社界を輕蔑なしたる豚の奴原片ツ端のらつかみ殺して名譽を揚げんと道は天晴利口な鳥連我後



れじを赤い〇〇の旗を押立て行列正しくフワリ〜と  
 喧嘩場さしてとび出したリ(チャンクハイガク)向ふもほん  
 とに出陣でたちは仰山大將おとから大音張り揚げ負けと見たら  
 ばウシロエス、メーの號令烈しく白旗用意し双方愈々  
 戦ひはトめた處がどうして豚の仲間からだの体軀が大きい  
 のるひが性質しちまへ鳥は自由に身軽くはたらけ鋭爪にて蹴倒  
 しけやぶり相手大勢た、せい殺して仕舞つてけんか道具を分捕  
 するやら豚衣取り捲生捕まきいけとてするやら向ふと段々追つたて

ふれて仕方がないから次第〜に自分の國まで逃げて  
 飯のて何度やのても喧嘩は勝たない是じやたまらぬ支  
 度してゐる旗をタテ一の號令下つて鳥の仲間へ降参し  
 たとは何んとみなさん正義に勝べたけんかはないぞ危  
(チャンクハイガク)これからマダ〜書きたいとこどが餘り  
 長いはアクビの種蒔き先づ此れ邊で帝國萬歳みなさん  
 萬歳(チャンクハイガク)

(大潰ふし)

花井準



是は世界にかくれなき老ぼれ國の支那の人吾自の本を  
かるしめて手向ひしたがうんのつぎ豊島牙山や平壤に  
黄海九連鳳凰城秀巖金州旅順口海城蓋平も皆負て其の  
上北洋艦隊總潰れ今に見られ北京の城もまたくち  
ちにはこなみぢん

〔敵ながらも〕

同人

浮のしづみつしんくをしてもいさぢたてたる貞女せう

〔日本軍人の家〕

同人

西の便りをさく度とにいつも嬉しひとばかり

〔戦勝〕

同人

海原や遠死浪路のはてまでも

あさ日かやく御代が長閑けさ

〔遠くとも〕

同人

かたくとも苦もなく落は威海衛飛んでゆきさの降参使  
自殺したのか丁汝昌顔が見たいじやないかいさ

〔三下り〕

花井仰



吾がかりた君にさしげしうへからは骨がおれまがくだ  
けよが北京ねとさにやねかぬを

〔川柳〕

同人

唇がほろびて北京さむくなり

〔と、一〕

同人

簾中よ姫といぬる、方も國の爲から看病婦

〔連戦連勝〕

素堂

昇る日に縮まるものかゝる猫の眼玉と支那のさも玉

〔連戦連勝〕

山内愛山

初日から勝た角力の話し哉

〔連戦連勝〕

同人

筒音に脆くも散るや芥子の花

〔皇威を海表お輝して〕

太田翠崖

倭菊旭と共に薫りけり

〔未來請和使に付て〕

同人

李公でも年が年なり爺ぢ面慈悲の戦に恭も降参



〔渡清軍人之困難を思むて〕

同人

雨に晒らしさき風にも吹かれ雪霜凌むでかざる梅

〔連戦連捷〕

素山

支那の北京へ支店を出して世界へ賣り出せ日本魂

〔家族保護〕

同人

ふんどしや破れて半金出ても軍人家族の保護はせよ

〔連戦連勝〕

西川

神風に吹き飛ばされつとんび紙鳶

〔皇運〕

袴田巽

菅の間や四百余州を握り酢

〔皇軍〕

同人

まはら男が赤きこゝろに染出す

みはたかやくもろこしか原

〔題しらす〕

西少將

唐土の虎伏す野邊に敷島の犬和心の花をこそ見せ



〔平壤の戦を思ひやりて〕 賀茂水穂

眞萩原露の白玉朝風にうちみだれけぞ高麗のあれ野は

〔皇軍平壤畧取の大快報を得て〕 長谷川貞雄

淵も瀬も敵の屍に埋めたてゝ大同江をち渡りせむ

武士のかさす劔にかげさえて月に聲あり平壤のあたり

〔海軍の大捷報を聞て〕

黄海にさかまく浪をやぶるつゝ

みゆくさ艦と今争すゝめる

渤海にひそめる龍をとらへ來て

君にさゝげむ時近づきぬ

天津日乃御旗かゝやくいくさ艦

向ふ海よはたつ浪もなし

〔大元帥陛下御親征御發轅を拜みまつりて〕

加茂水穂

いでましの御稜威かしこし朝風に

錦の御はた西にぞかひて



〔祝捷大會によめる〕 賀茂水穂

よるづ代の聲をそひきけ不忍の

池にも魚鱗を盛り出らむ

〔軍艦〕三首の一浪速 同 八

仇浪をうちも沈めて浪速江の月の光りを輝夜にける

〔同〕 秋津洲

み雪なす白旗とりて秋津洲富士より高たいたは立けり

〔同〕 吉野

み芳野のはげしき風にうちみだれ

ちりうせにけむ仇浪の花

〔征清軍人〕 岡部讓

嘯きし虎はなつたぬますり夜よ

ありぶる龍を手とりにはせよ

〔祝新年大勝利阿房多羅經〕

武説阿房多羅經抑々段々支那日本ノ戦争ノ行立子供



毛於三モ承知ノ通り支那ハ大國日本ハ小國大小ツク  
 ナラ成程キヤンノ勝カモ知ナイ國ガ大ナラ勝ニハ極  
 ラヌ國ガ小ナラ負ニヤ極ラヌ蟻ニ芋虫鯨ニ鯨ホコ獅子  
 ニ蜜蜂コイツモ叶ワヌ大國自慢ノ老溺親爺タソコデ日  
 本ハ上カラ下マデ貴賤貧富ヤ老若男女モ心ヲ協セテ日  
 本全國隔カラ隔迄神モ佛モ木ヲモ草ヲモ馬ヲモ牛ヲモ  
 犬ヲモ猫ヲモ鳥ヲモ虫ヲモ女子モ酌子モ手ニ汗握ツテ  
 何ヲモカンデモ支那ノ奴ヲニ負テハタマラヌ狸爺父ノ

生首取ル迄ドシノヤヲカセ兼テ名高キ旅順ノ砲臺北  
 京ノ政府ガ金囊振ツテ旅順ニ次込頼ミニ頼ンダ堅固ノ  
 砲臺前カラ攻テモ横カラ攻テモ縦カラ攻テモビク共動  
 カヌ英佛露獨モ一步ヲ讓ツタ世界ノ稀モノ日本ノ軍略  
 コソリノト金州上陸反テノ方ヨリボツリノト旅順  
 ニ攻込囊ノ鼠ダバ子ノ兎ダ一日立デモコツチノ氣儘ダ  
 ソコデ旅順ノキヤンノ鼠モ裏カラ攻ルハ夢ニモ知ナ  
 イ寢耳ニ水ダヨ水雷布設モ無功ニ屬シタ百有餘門ノ大



砲たうモ有あれ尾筒つぐちん口向むけルニヤ大いふくテ困あまツタ不便ふべんノ大砲たいほうダ何なんニモ  
 成ならナイ裏うらカラ來くるナラ三日さんじつモ前まへカラ明あかシテ吳くれタラコシナ  
 ニマゴくシナクテ足たりルヨ大砲たいほうノ尻しりカラ來くるトハ意外いがいダ  
 アンマリ無理むりダヨ進退しんたい谷きやうマル降こう參さん極きよくマル日本にっぽんノ軍人大  
 山たけ大將だいせうハ五萬ごまん以上いじやうノチヤンく坊頭ぼうとうヲ一度いちどニ捕とらテハ日  
 本にっぽんガ迷惑めいわくドンドト逃にげロトドナリ付つくレハ周章しゅうしやう狼狽ろうたい中ちゆうニモ  
 聊いさカ奸智かんちのアルヤツア胡麻こまカシ手段しゆだんニ俳優やくしやき氣取きとテ演劇えんげきヲ  
 スルヤテ町人ちゆうじんメカシテ徘徊はいかいスルヤテ混雜こんざつ極きよくマル「是こゝヨ

リ廿四にじゅうし孝ノ淨溜理じやうりゆ」デ、ンウんン李鴻章りこうしやうをてれ戦いくさをせ  
 めて一度いちど勝かちならば耻はぢはか、せはせぬものを頼たの甲斐みがいなき  
 「ハンチツケン」關羽くわんりゆうの力ちからも有あるならば勝かちたとたつた一言ひとこと  
 の電報でんぱうが聞きいたい々々いゝいゝいゝ」コンナ文句ぶんくハ於お經けいニナラナ  
 イ成なる力ちから成なりヌカ目め元もとヲ知しル兎角とがくめ目め元もとハ油斷あぶらたんガナラナイマ  
 ゴ、シテ居ゐリヤ奉天ほうてんナンゾカ北京ぺきんモ突つレル見みるニ見兼みかね  
 テ「デットリソング」ガ仲裁ちゆうさいメカシテソ、日本にっぽんへ出掛でかけ  
 タ所ところガ李鴻章りこうしやうカラ添書そへしよガアルカラ伊藤いとう總理しゆんりニ面會めんかいタソ



ムノ何ノカンノトブル、上陸スルニハシタレド資格  
 ガナイカラ面會拒絶ダ失望窮マリコイツア又氣毒餡コ  
 口餅ヤ美味モンダ尻餅痛モンダチヨツクラ持ヤ賊タヨ  
 土鼠ヤ地ノ底ムク、モチヤゲル成程支那デハ馬鹿カ  
 李鴻ガソシナコタシラナイ日本ニ比リヤ子兒ニヤ劣々  
 成程總理ガ面會拒絶モ道理デアリマスヘタチ仲裁採用  
 シタナラ貴衆兩院議員ハ吠々改進黨デモ自由黨デモ黨  
 派ノ争ヒ昔ノシヤレダヨ何デモカンデモドウデモコソ

テモ北京ヲ取ラナキヤ承知ガナラナイ一体全体支那ト  
 云ヤツア國バカ大クテ慾バカ深クテ馬鹿ク多クテ世  
 界ノ邪魔モノ時節ガ來ゾヨドシ、ヤラカセチーン此  
 ノ御手並ヲ以テ攻メ立レバ天ノ覆フ所地ノ載スル所日  
 月ノ照ス所霜露ノ落ル所船車ノ通スル所草木ノ生スル  
 所全地球到ル所我 天皇陛下ノ御威徳ハ日月ノ世界ヲ  
 照スガ如ク旭ノ旗ハ威風赫灼トシテ世界ニ輝キ先ハ手  
 近キ所ノ老國ヲ擊平ラゲ世界各國我 天皇陛下ノ錦



御旗ノ旗風ニ靡カヌ者コソナカリケル大日本帝國萬  
歳萬々歳

〔川柳五〕 (以下抄出)

支那人の汚名を流す大同江  
南京はあたはの尻ツ尾まいてにげ  
もろこしを團子にしたる日本一  
子供まで南京玉を針でつぎ  
火花ちらして戦ひし吉野艦

〔狂歌二〕

ギハクと出す福たまの豚尾漢タ、一打に渤海すなり  
キヤンクに加勢するやつ一人でも

カタツバシから首ハン子ツケン

〔下二〕

のるの西瓜を北京でもらひつなぎあはせて國土産

〔清朝始終不幸〕

支那本敗太夫

行水の、なかれと支那の身しらすが、姿見ゆるし長辨



李  
髪をぐづぐづせして、北京をたちいで、「我清國は育ち  
人に面を見知られぬを幸ひ、馬鹿づくりとなつて、入  
込みしは、朝鮮の御身の上、若し日本に取られやならん  
と、余所ながら保護する清兵、夫れと曉さとて來りしや、  
ハテ合點の行かぬ」と首傾け思案おくる、向ふには、  
錦のはたの日本武士、天津にてのいひなづけ、發表あ  
まし其日より、かたく守つて引こもり、支那に威勢を  
見せまぐも、總軍勝利の旗の色、いつでも同じ弱虫の、

泣く音は共に、俘虜どもが、けふ命日を敗報の、知ら  
せよ胸をびくく、と、「廣ひ世界に誰あつて、支那がつ  
よひといふものも、訪たずふ人もなさけなや、チリくバ  
ラく、敗北し、ね逃げなされた其さまと、思ひ出す程  
馬鹿らしい、によるく、の脱け落ちが、心計りの此懺  
悔、千敗万負の教しへすと、思ふて降参えて下され、  
チャンく坊主く、「誠お今日は十月廿日、我身日本  
にとらはれし五日目、くれゆく月日を百日あまり、南



無清兵敗北頓馬を阿呆に申し身しらすま、國と國との  
 のいふかはし、ありし様子をさくよりも、呼びあはる  
 らをまのうちに、日本の數万兵隊を、見れば見る程に  
 さまじい、こんな殿御と對戰の、身は弱虫の果報ぞと、  
 海にも陸にも驚るたは、のこらず敗となつたるが李鴻  
 章とて歴つよく、むとり威張て居るもの、魂ぬけし  
 安本丹、公使の力もあるならば、たつた一言仲裁の、  
 御聲がきいたいと、英人の許に國投げ出し、泣涕

こぼし見すばらし(コ、ラデチヨン)

《清兵大敗》

かゝし

蜀黍は堪なく折きて夕野分

《清兵溺死》

かゝし

浮て行く慈姑はかなし落水

《雨の夜》

雨の日に、東京近く、鬱いで引かれ來る、支那の兵、  
 見物に入り込むステーション、大勢押合ひまわくら、



傘や蝙蝠の立姿、巡查の門に立て呆れがは、早くも氣  
車で着た、生捕唐人は、顔を掻むけ、豚の尻尾をくる  
くまいて、キタナイく面目ないと、佐倉と病院へ、  
巡查や憲兵、あとからついで送りゆく、

（チヨンキナ）

法螺支那、々々々々、チヤンく負けく、李チヤン  
弱さで、北京が終、

（春さめ）

戦に、すのぼり負ける、支那の兵、刃風鋭に日本刀、  
いかで勝てよう道理なし、小供でさへも一筋に、御國  
思ひの氣は一つ、わたさや内職主は兵、そして御金が  
澤山出来たらなら、サアサ、義献せうではないかな、

（綱は錠意）

陸は師團を手わけして、平壤内へ着込みける、折し  
も弾丸はけしき其中に、敵のソツ首ひの擡ぎ、むさる  
どさんどエ、と引く、支那はたこぬし弱ものにて、我



將校に兩手を合せ、よしやれゆるしやれ、頭がぬける  
頭ぬけるはいとひはせぬと、貰ふつもりの賞與金、な  
くなるはく、泣てたのんでゆるしとへと、殺さま  
うかどわしや氣にかゝる、誰じやく人じやないもの  
豚じやもの、鐵砲も刀も何おもいらぬ、サツサ逃げ  
てけく、

〔占領地〕

泧川居大醉

菊植る畑の殖ゑて秋樂し

〔北進軍〕

山崎兵吉

寒菊の雪にたゆまぬ姿かな

〔占領地〕

梅處

粟散て菊の畑けとなりけり

〔川柳四〕

孔明が居たならチアと支那は泣き

小選

韓清は日本のまたをくぐるあり

中村奴情

日の恩と拜んで居るや冬の蠅

機操



黄海は敵にかたぎと豚尾洒落

李仁美路

（名古屋甚句）

夢蝶

今度此度戦争に付いてエ、日本武官の勇猛に、ナヤン  
 く坊主はひとあだれ、あまり死傷が多死故、地獄の  
 釜も間に合ぬ、もて李公の云ふことにや、コレく  
 申し袁世凱、わーも跡から行くほどに、地獄の様子を  
 みてござれ、ヤウくどあせられて、臆病みれんな袁  
 世凱、地をくのひねやくと出でたちて、往たりたり

の大勉強、今は生死もヨヲホ、イ、エーわからぬいエ

水雷火伏せて眺めりや算用が違ふて味増を附たる豊島

沖、支那の軍艦牙山へ逃る日本兵が追ひまくるナヤン

兵の間牒來の大籠捧の心配ハイ慌るゝ逃るぢやれ

まへんか

（名古屋甚句）

夢蝶

今度このたび戦争についてエ、日本軍事の精銳に、



支那の大軍をなみじん、袁世凱のさてねて、かけて  
糸つる△△も、コリヤたまらぬと逃げたせば、跡にの  
こりし李鴻章あれよくと口あひて、逃げ後れしか殘  
念や、もふこうなれば是非がなぬ、國より命が大切と  
ソコテとなりへ馳付て、コレコレ申し旦那どの、れ前  
も知てあるけれど、今度の戦にやわしや勝てぬ、くと  
い様だがもう一度、日本へ詫をはヨヲホ、イーてれく  
れエ

幸一

《ギツチヨシノ節》

んまにさそうか煮しめがよいかギツチヨシノくなまの  
くわいの料理方ねやまたコ、にもコロく、れちてゐる  
ヨイヤサギツチヨシノ

《惚れて通ふ》 (變調)

遊園亭

攻めて向ふにナニ辛からふ今度も勝うと闇の夜道を辿  
り行く先や左程にも勝ちませぬの、此方や勝ちつづけ  
ま、山坂越えて撃に行く段々遠ふたら嬉まかる實如何

幸一



してかよわい兵だやら情けない子

〔色がある〕 (變調)

無名子

敵が居る承知で攻めて斥候も踏出すからは飽くまでも勝つて貰はにやならぬぞへ

〔羽織かくして〕 (變調)

當世子

涙かくして聲曇らせてどうでも 今度は負らぬと言ひつゝ 外國へ李降相 仲裁たのむとすがりのゝア、聞かしやんせ豚の聲

〔紀伊れ國〕

支那のくよはほととさなしの老國に、勝せ給ふは日本兵とすが海陸大名よ、さて朝鮮おいたりては、大鳥公使が見やぶりの、閩族追ひ出しはねたりを、致はは豪力開化黨、たのめば日本の義勇兵、忽ち今度の大ーやうり、陸には成歡まつとささまづ黒煙りを吹き出して、ついで取たる支那の兵

〔登り下り〕

花の家一すか



戦闘お下手のチャン／＼さんよ、借もれ弱いた人さん  
 かいな、ね後かな癖か自惚て、軍艦をたよりに大開戦  
 人は滅る／＼無体に負る、最期數艦か覆へる  
 勇ましいやへ元山支隊死あふや歸ぬ皆覺悟  
 英じやないかい佛々いふあはふと盡さにやなふぬ豚  
 帯の名でさへ南京さすと聞いて嬉しいわしのむね  
 李鴻章とて其お姿は繪にも書れぬ阿房面  
 花も美事よ香りも高し支那へ廣げる菊畑

何の漢のと云はずおれ負け四百の直打もない支那サ  
 嘘と泣のが上手な計りホンニ手もかい支那もない  
 威海お世話をも日本に焼せ末と黃海するである  
 (縁かんな節)

夜の夜中も軍人の道に斥候風紀衛、箒を焚いて嚴重に  
 張るは哨兵線かいな

(とや／＼節)

逃げやしやんせ逃げやしやんせ、メッポ矢鱈に逃げや



じやん一セ大將達や真先からでも遁しやえしたか、如  
何しても日本よや勝れないテモマア難儀な戦争だ子、  
バア〜

（さんごん）

清國の〜のふたをふまへて又勝とつて、舟すそふを  
海原へ、よき船ぶんどりまたまけの支那、ばかなチャ  
ン〜ひやまらせ、李鴻章かけおちの兵、進むへいしや  
よしあしちまた、ちから定めや勝いくと

（阿房駄羅經）

佛説阿房駄羅經、抑も段々支那と日本と、戦争の行立  
て、聞いてもクンチイ、朝鮮内亂閔族なんぞが、支那  
れ公使と、密に謀て、兵士を呼んだが、日本の腹立ち  
天津條約違反の事から、騒動が始まり、大鳥公使が兵  
士を率ゐて、朝鮮談判、獨立ほるのか、政治の改革、  
ニツ一ツの手詰の催促、返答に困て、王妃が泣き出す  
閔族逃出す、夫れに續いて、豊島海戦、日本の軍艦



獲たり賢とし一ツ逃すな、汽船はブク／＼チヤンチヤ  
 ンドブドブ、操江の捕獲だ、廣乙は駈け出し、淺瀬に  
 乗り揚げ、引くにや引かれぬ、進退谷まる、艦体破ぶ  
 れる、全体怖がる、ニツチモサツチモ、動きが出来な  
 い、腰が抜けたか、艦長はグラツツ、艦体ブグツク、  
 海ではやりきる、牙山の戦争じや、支那の大將葉と云  
 ふ奴、逃げるが上手で、朝鮮藝妓の上着を冠けて、サ  
 ツサと逃出す、大きに御苦勞、ヨウコン逃げたよ、逃

げるど負けるが名譽の國だが、褒美貰つて安樂世界だ  
 コナ事ナラ負けるが専一、平壤なんぢは、三ツ日も  
 先から、逃げる覺悟は致したけれども、寶貴の野郎が  
 逃げるはイヤだと、政府の意見に、合はない許りに、  
 勝氣おなつたが、了簡違ひだ、黄海々戰軍艦イカして  
 膽玉コツクて、支那の客將ハンチツケンだが、片腕モ  
 ガレル、丁の野奴は、大砲の怒鳴りで、聾になるや、  
 自旗立てるの、逃げるが善いだの、内部に騒動、日



本の軍艦樺山中將は、ニコく笑つて、コンナ海戦、  
 朝飯前だよ、日本の伎倆を、示すに及ばぬ、併々愉快  
 だ、郵船會社れ、清水と云ふ人、海戦最中、寫眞を撮  
 るやら、平氣なもんだよ、開けたもんだよ、支那の軍  
 艦、種々の藝道、ナカく上手で、水中にもぐつて、  
 鮑を取るのか、蛤取るのか、鯨の眞似して、塩を吹た  
 り、水の中もポツポと燃たり、威海御苦勞だ、大さ  
 お御世話だ、海にハ樺山、陸には山縣、大山大將、旅

順々々と、攻先込む軍勢、支那の運命早いか遅いか、  
 負けるにや違ひない、狸親父が了簡違ひだ、日本小國  
 丸めて吞らじ、飛んでもない事、思て失策ぞ、國王腹  
 立ち、羽織は脱がされ、帽子は取られる、成程日本、  
 國がコツクで、膽玉イカクで、人間利巧で、戦争が上  
 手だ、今度の戦は、文野の戦ひ、日本の軍勢は、支那  
 の内地で、演習の積りで、ドシドシやらかほ、北京の  
 天子も、ベツく泣ても、氣の毒ながらも、日本へ寄



留<sup>り</sup>だ、先<sup>まづ</sup>は我<sup>わが</sup> 天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>陛下<sup>ひや</sup>下<sup>か</sup>萬<sup>まん</sup>歲<sup>さい</sup>陸<sup>りく</sup>軍<sup>ぐん</sup>萬<sup>まん</sup>歲<sup>さい</sup>海<sup>かい</sup>軍<sup>ぐん</sup>萬<sup>まん</sup>歲<sup>さい</sup>帝<sup>てい</sup>國<sup>こく</sup>萬<sup>まん</sup>  
歲<sup>さい</sup>支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>の政<sup>せい</sup>府<sup>ふ</sup>の運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>も近<sup>ちか</sup>きああり、南<sup>なん</sup>無<sup>む</sup>阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>た</sup>佛<sup>ぶつ</sup>く

《豚退軍の歌》

逃<sup>お</sup>げるちやんく、後<sup>うしろ</sup>から、辨<sup>べん</sup>髮<sup>ぱつ</sup>しツかどふんづかみ、  
引<sup>ひ</sup>ばうしるへオツピヨコく、緩<sup>ゆる</sup>めば前<sup>まへ</sup>へとオツピヨ  
コく、手<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>もがく、動<sup>うご</sup>かえて、とんぐりまなこを  
ツチく、チヨン切<sup>き</sup>れく、豚<sup>ぶた</sup>の首<sup>くび</sup>、今<sup>いま</sup>更<sup>さら</sup>汚<sup>ご</sup>免<sup>めん</sup>もあるも  
の<sup>の</sup>か、痛<sup>いた</sup>いも痒<sup>かゆ</sup>いもあるもの<sup>もの</sup>か、日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>刀<sup>たう</sup>は切<sup>き</sup>れるぞよ、

一<sup>ひと</sup>振<sup>ふ</sup>千<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>首<sup>くび</sup>コロリ、日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>の銃<sup>てつ</sup>砲<sup>ぱう</sup>上<sup>じやう</sup>手<sup>てう</sup>だぞ、百<sup>ひゃく</sup>發<sup>ぱつ</sup>百<sup>ひゃく</sup>中<sup>ちゆう</sup>首<sup>くび</sup>  
コロリ、コロリく、と豚<sup>ぶた</sup>の首<sup>くび</sup>、ホントニとせうせうりこ  
うせう、顔<sup>かほ</sup>色<sup>いろ</sup>蒼<sup>そう</sup>然<sup>ぜん</sup>草<sup>そう</sup>色<sup>しき</sup>に、丸<sup>まる</sup>一<sup>いつ</sup>印<sup>いん</sup>は大神<sup>たいしん</sup>樂<sup>らく</sup>、愛<sup>あい</sup>親<sup>しん</sup>覺<sup>かく</sup>兵<sup>へい</sup>  
衛<sup>ゑ</sup>テ<sup>て</sup>ン<sup>ん</sup>テ<sup>て</sup>コ<sup>こ</sup>マ<sup>ま</sup>イ

《退軍の歌》 其一

骨皮道人

逃<sup>に</sup>げよ逃<sup>に</sup>げく、皆<sup>みな</sup>共<sup>とも</sup>に、スダコラヨウイヤサとかけ出<sup>で</sup>  
せよ、日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>は素<sup>す</sup>敵<sup>てき</sup>強<sup>つよ</sup>い國<sup>くに</sup>、此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>はベ<sup>べ</sup>ラ<sup>ら</sup>ボ<sup>ぼ</sup>弱<sup>よわ</sup>い國<sup>くに</sup>、  
強<sup>つよ</sup>いと弱<sup>よわ</sup>いが戦<sup>いくさ</sup>へば、トウヤ弱<sup>よわ</sup>いが負<sup>ま</sup>けなるぞ、命<sup>いのち</sup>と



られちや堪らない、命あつての物種を、耻も外聞も入るものか、早く負けへしめけるべし。

其二

逃げよ逃げく皆共に、スタコラヨイヤサとかけ出せよ、縦を弱いと云は里やうが、腰ぬけ兵士と笑ひよ、が日本人には叶はない、首と切られちや命なし、若しも命のない時は何の樂もみあるべからや、銃砲で打たれぬ其中に、人に構はす逃けるべし。

其三

逃げよ逃げく皆共に、スタコラヨイヤサとかけ出せよ、元我々が出て来たは、命を捨る爲ならず、ホンの些細な日當く云は人足同様ぞ、國の爲どの何の事、夫では約束違ひなり、今更云ふても無駄なれば、何ても構はず逃るべし。

其四

逃げよ逃げく皆共にスタコラヨイヤサと駆け出せよ、



給金渡らば銭いなし、物ども食えずに腹へらし、れ負  
けに前之敵なるぞ、ウカしくして居りや首コロリ、こ  
んな馬鹿氣た事はない、こんな詰らぬ事はない、何處  
の何兵衛に義理やある命のある中にけるべし

其五

逃げよ逃げよ、みな共おスタコラヨイヤサとかけ出せ  
ま我はチャン／＼先方は、天下晴ての人間ぞ、殊に鍊  
砲も上手なり、殊に刀も切れるなり、逆も我等の瘦腕

て日本に勝やう筈はなし、苦しい思いをせぬ中に逸

足早く逃るべし

ほらを吹よせ支那政府木の葉天狗の無駄軍議

人目の奇麗に咲ての居れどもろを散りたるけしの花

お玉杓子を見たよな頭みつともないからよしお支那

李鴻章とは有名無實丸で大馬鹿大たわけ

主の名譽を此號外で見ると嬉しい大勝利

のろい豚尾に似合ぬ所いはいはも逃けるが早い足



是れも前世の袁世凱トやなどと濟えた敗惜し  
 待にまつたる軍の便り又も勝利を菊の花  
 勝利の知らせに飛び立伸思を鏡よるくばを置いて立  
 支那の政府はふるふさ大根味増をつけく苦い顔  
 威海事をば云ふ唐威張り嘘をあらべた出砲臺  
 今に立るよ北京の城に光る錦の日章旗  
 やがて北京を占このうさぎ日本かちく山となる

（天津繪）

廣坊散史

幾等あるとも南京虫め捻りてゆきぞ二本ゆび  
 日清の戦争トかけて拍子木トとく心は二本かちく  
 京城の小戦トかけて貧乏暮トとく心空砲に追れる  
 日本の軍略トかけて正札附商ト解心は負ぬ法ト立る  
 李鴻老爺も軍さにまけてハゲた頭がまたはける  
 いつも勝利とさく桐御紋大和にしきの光る旗  
 清で渡せば性命がないよ性命惜くば支那で出せ  
 生捕チャンく只置よりも仁和賀の臺でも曳せたい



捕虜の首は八百屋へなぶべくわいかにぶらのたるしうり  
行か参をんしまか看護の役に一お義の爲め國の爲め  
豚尾頭へ兩手でさがりぶらんて運動して見たれ

《今宵忍ぶなり》

敗けて逃げるなり、四ッ這ひになつて忍ばんせ、日軍  
が捕りへたり、支那名物大花な豚じやと泣かさんせ  
慈姑頭を大きな珠數に出来して進たい大佛屋  
分捕られ物上海で仕込でる

牡丹臺士氣ふんじんの勇で攻め

《ねたけきん》

チヤンく鈍、愚昧か子、豚尾の毛が長い子、肚裡ま  
で解る子、夫をエ俘虜にいたして子、ブツリ剪つて目  
本へ、ズルくズル引廻すヘラヘーノヘラくヘー  
清國の夜番日の本御用心  
しんこくが日和つがきで早くとれ  
負しやうぎ手に金銀も歩兵もなま



下手將某王の戦地でのめられる  
日ふ當り慈姑南京皆しなび

《韋駄天節》

夕べ見たく大きな夢を、旅順口をば脊み負ひ、北京  
の城を腰にさけ、定遠鎮遠下駄に穿き、其又帆檣杖に  
曳死、四百餘州を一跨ぎ、崑崙山に尻をかけて、意外  
咽喉が渴くゆる。黄河の水を掬ひ揚げ、一二、三口と  
飲干せば、何やら咽喉に引かゝり、咳一咳と咳ばらい

唾を吐出し能く見れば、萬里の長城飛んで出た

《大黒天の替唄》

李鴻章と云ふ人は一に大國を踏まへて二に憎くを仕打  
して三に策略の齟齬をして四ツ世の中に笑はれて五ツ  
いつでも負いくさ六ツ無性に法螺を吹後七ツなんでも  
勝は氣込み八ツ矢鱈に兵を出し九ツ此の世の別れにて  
十でとうく滅亡する



今般日清開戦ニ際シテハ苟モ皇國臣民タルモノ奮テ國  
 恩ニ報スルノ決心莫クンバアルベカラス况ンヤ身軍籍  
 ニアルモノニ於テハ奮進努力斃レテ息ムノ精神ヲ有セ  
 サル可カラス這回郡下各町村協議ノ末左記家族保護法  
 ナ設ケ着々實施諸子盡忠ノ萬一二酬ントス幸ニ家累ヲ  
 顧慮スルナク専心一意軍人タルノ本分ヲ盡サレンコトヲ  
 時殘炎全ク消セス諸子邦家ノ爲メ自愛セヨ

明治廿七年八月 靜岡縣長上敷知濱名郡長青沼沃

長上敷知濱名郡出身各兵員御中

長上敷知濱名三郡下兵員家族救護法

- 一 三郡下軍人家族保護ノ程度ヲ一定センカタメ各町村
- ニ 軍人家族保護委員ヲ設ケ其人員ハ各町村ノ大小ニ  
 應シ適宜選出スルモノトス
- 三 軍人家族ノ保護ヲナサントスルトキハ委員ノ評決ヲ  
 經其適否ヲ調査判定スルモノトス



但委員會ハ町村長ヲ以テ會長トシ其他總テ普通會

議法ニヨル

三軍人家族ニシテ其保護ヲ受クルヲ得ルモノハ左ノ例

ニ依ルベシ

一所有不動産貳百圓未滿 但家屋ヲ除ク

一同 動産貳百圓未滿 但家具ヲ除ク

一不動産動産相通シテ貳百圓未滿 但家屋家具ヲ

除ク

一不動産動産トモ三百圓未滿ニシテ家族中強壯ナ

ル男子ナク六十年以上十八年未滿ノ老幼及婦女

子并疾病廢疾者等

四保護ヲ受クルノ家族ハ總テ委員ノ評決ニヨリ時價

ヲ以テ左ノ額以内ヲ給與ス

一罹災ノ家屋ニシテ官ノ救助ヲ受ケサルモノハ災

前ノ評價格半額

一男子壹人立米五合女子壹人立米四合



但七拾年以上十五年未滿男女ニ不拘玄米三合  
五軍人ノ家族中強壯ノ男子ナク耕耘ヲナス能ハサルモ  
ノハ適宜救耕ノ方法ヲ設クルヲ得

六前三四五項ノ如ク定ムト雖モ委員ノ評決ヲ以テ實際  
ノ情況ニヨリ其額ヲ増減シ若クハ等級ヲ設クルヲ  
得

七保護金ハ各町村限リ前條ノ標準ニ據リ第二ノ判定后  
町村長ニ於テ給與スルモノトス

八義捐金ハ其保護金額(凡向六ヶ月間ヲ)概算シ其町村内有

志者ヨリ普子ク募集スルモノトス

但成可丈細民ニ及ホサソルヲ要ス

九義捐金ハ左ノ二期ニ收納スルモノトス

但一期ニ於テ一時ニ出金スルモ妨ケナシ

第一期 廿七年八月廿五日

第二期 全 年九月廿五日

十總テ義捐金ハ委員ニ於テ取纏メ町村長ニ送附スルモ



ノトス

十一 應募者ノ氏名金額ハ其町村内ニ告示シ且ツ郡役所  
ヘ報告スルモノトス

十二 現役兵ニシテ出兵ノ場合ニアツテハ其家族ハ總テ  
本則ニ依リ保護ヲ受クルヲ得

十三 出兵中戦死者アリテ所屬隊ヨリノ通知ヲ得家族等  
ニ於テ埋葬ヲ營マントスルトキハ所在町村現住者ハ  
可成會葬ニ連セシメ且ツ貧困者ニアツテハ万事葬祭

ノ便宜ヲ與ヘシムルモノトス

但其大字現住者ニ在テハ必ス一月一人ノ會葬者ヲ  
出サシムルモノトス

十四 前條戦死者ノ家族ニ對シテハ追テ扶助料下附ノ時  
マテ出兵中同様家族ノ救護ヲナスモノトス

静岡縣長上敷知濱名町村長會ニ出シタル誘導書

征清軍戦死者(三郡下)出身者) 建碑費募集趣意書



清國ノ兇暴ヲ膺懲シ東洋ノ平和ヲ悠遠ニ維持セント欲  
スル所ノ我征清軍ハ此嚴冬沍寒ニ當リ懸軍萬里深ク敵  
境ニ入り將ニ北京城下ノ盟ヲ聞ク近キニアラントス  
曩者畏クモ大元帥陛下大勳ヲ廣島ニ進メサセラレ  
爾來殆ト半歲ナラントス是ヲ以テ民心内ニ奮テ兵氣外  
ニ揚リ敵軍悉ク摧破セサルハナシ既ニ牙山平壤豊島黃  
海ニ捷チ九連鳳凰ノ兩城金州大連灣ヲ畧シ遂ニ東洋無  
比ノ軍港族順口ヲ占領ス皇軍ノ向フ所草木ノ疾風ニ靡

クカ如クナラサルナキニ至レリ  
顧ミテ我三郡下出身者ヲ覓ルニ其從屬スル第十八聯隊  
ノ如キハ彼ノ平壤ノ戰ニ於テハ著名ナル險路ヲ經テ非  
常ノ困苦ト欠乏トニ打克テ全ク敵ノ背後ニ出テ一呵シ  
テ堅壘ヲ拔キ直チニ牙城ニ迫リ其陷落ノ期ヲ速促セシ  
メタル者ニシテ實ニ彼カ第一ニ白旗ヲ植テタルハ此支  
隊ノ攻撃線ニシテ其降參ノ東札ヲ呈シタルハ第十八聯  
隊第三大隊ノ許ナリト聞ク又傳フ九連城ノ一戰我聯隊



ハ特ニ總攻撃ニ先ツ事一日鴨綠江ヲ水口鎮ノ上流ニ渡  
 リ敵ノ側背ニ迫リ正面軍ノ渡河攻撃ヲ容易ナラシムル  
 ノ光榮アル重任ヲ受ケ勇氣百倍而ノ彼ハ鴨綠江ノ對岸  
 左右ニ堅固ナル砲臺ヲ構ヘ歩騎兵之ヲ守リ彈丸雨注ナ  
 ルヲモ意トセス之レカ正面ニ對シテ白晝徒涉シ一死國  
 ニ報スルノ決心確乎不拔ナルヲ以テ將校下士卒トモ泰  
 然トシテ此最大危險ヲ冒●肅々トシテ順序ヲ亂サズ洋  
 々軍歌ヲ謠ヒ鼓勇一番直進シテ又他ヲ顧ミス嗚呼此大

膽不敵ナル動作ニ對シ猛烈且ツ稍精密ニ射出セル敵ノ  
 砲撃モ我一兵ヲ損セスシテ全ク徒涉ヲ終リタルハ思議  
 ス可ラサル所ニシテ茲ニ征清諸軍ノ第一着トシテ名譽  
 アル我聯隊旗ハ先ツ敵地ニ樹立セラレタリト如此赫々  
 タル拔群ノ功績ヲ奏スル大ナレハ隨テ死傷者ノ數多カ  
 ラサルヲ得ス平壤ノ戰ニ我三郡下出身者ニシテ千軍萬  
 馬彈丸雨飛ノ間ニ立チ終ニ名譽ノ戰死ヲ遂ケタル者殆  
 ト十數名ニ及ヒ又山野ニ暴露シテ毒瘴濃霧ヲ侵シ陋巷



汚里ニ行住不良ノ空氣ヲ吸收シ爲メニ不幸病ヲ醸シ遂ニ不歸ノ客トナリタルモノモ亦十有餘名ノ多キニ及ヘリ嗚呼悲哉抑モ人生ノ悲慘ハ死ヨリ大ナルハナシ殊ニ懸軍万里一朝異域ノ鬼トナリ父兄朋友ノ之ヲ葬ルモノナク祭司僧侶ノ之ヲ吊フ者ナキニ至リテハ丈夫ノ鐵腸モ爲メニ寸斷シ情緒紊テ糸ノ如クナラザルヲ得ンヤ嗚呼悲哉以是推之トキハ大目的ナル北京城陥落ニ至ル迄尙幾多ノ戰沒者及病死者ヲ見ルヤ必セリ依茲三郡有志

ノ義捐ヲ募リ當濱松五社公園内ニ於テ適當ノ地ヲトシ前陳死亡者ノ爲メ一大紀念碑ヲ築造シ此等死者ノ靈魂ヲ吊シ傍ラ遺族因戚等ノ愁情ヲ慰シ且ツ后人ヲシテ征清軍事ノ千古未曾有タルコトヲ知ラシムルト共ニ當時郡下人士ノ敵愾心ニ富ミタルノ結果ヲ見セシメ一ハ西遠地方ノ一大壯觀ヲ悠久ニ存遺セント欲ス有志ノ諸子請フ奮テ賛成盡力アラントヲ

明治廿七年十二月



U-32

明治廿八年三月廿日印刷  
全年 全月廿六日出版

(非賣品)

日本赤十字社静岡縣長上敷知濱名三郡  
在住社員五百四十二名代表者

静岡縣敷知郡濱松町榮二十九番地

編輯兼發行人 山口鉞三郎

全縣全郡濱松町紺屋百二十三番地

印刷人 內田友治

印刷所 郁文社

頁



